平成 20 年 1 月 10 日

教員養成のための仕事から得たもの

北斗市立大野小学校
教諭　佐々木　朗

はじめに

　自分が大学で学生に指導をするなどということは思ってもみなかったことであった。大学の先生は、それぞれの分野のスペシャリストであり、私のようないわゆる普通の先生に比べて雲の上の人のような存在であった。

　そんな思いの中、機会あって大学院を修了したということもあり、大学の恩師に当たる山崎先生から、学生の指導を頼まれ、二つ返事で了解はしたものの、初めての経験であり、10 月が来るまでずっとドキドキしながらその日を楽しみに待っていた。

教授心理学

　私の受け持ったのは教授心理学。中身は、授業作りのイロハの勉強である。学生の反省の中にもあったが、講義題目と内容が一見するとピタンと一致しない。学生の疑問は私にとっても同じであったが、パワーポイントを使った授業づくりを６回ということで、「心理学。えーっ！？」というのはなくなった。あともうひとつ安心できたのは、何回かその授業を経験されている野口先生（日新小学校）と一緒に仕事ができるということであった。

　一応手当がでるので教育委員会に兼務届を出し、了解をもらい、どんな内容か流れをつかむのに最初の講義から顔を出し、流れをつかむようにした。

　講義は毎週火曜日の午後６時からである。この日だけは、仕事を早めに切り上げて、大学に向かった。平成 16 年、17 年と大学に通っていたこともあり、「久しぶりー！」という感覚こそなかったが、学生としてキャンパスに入るのと、教員として入るのでは、気持ちの張りつめ方は違った。

講義開始

　授業には 19 名が参加した。11 月までは、ずっと山崎先生がビデオを通して、授業づくりのポイントについて、講義をされた。発問づくり、教材づくり、評価の仕方などなど、普段私が仕事としてやっていて、「そうだ。そうだ。」と思いながらも、「へえ、そんなこともできるんだ。」などと思うことも、多々あった。学生たちはまだ教育実習

にも行っていない２年生が中心で、「教わった」ことは今まで長かったが、「教えた」ということは未経験であった。だから、「発問」と「質問」の違いなど、新しく知ることがとても多かったと思う。学生たちは、とても真面目だった。ビデオをきちんと見て、板書もきちんと取っていた。自分も 30 年ほど前は、こんな感じだったんだなあと思いながら、一緒に講義を受けていた。

私は、自分の担当の講義が始まるまでは、だまって、聞いている側でいたが、学校の様子が少しでもわかってもらえればと思い、毎回、自分の学級通信を持参した。学生たちはどれだけ読んでくれたか知る由もないが、学級担任の楽しさや苦しみ、また、教育のロマンを感じてくれたのではないだろうか。

パワーポイントの授業

私のメインの担当はパワーポイントの指導であった。自分自身なかなか授業で使うことはないが、研究発表では、そこそこ使っていたので、その基礎を教えることは、大丈夫であった。ちょっと気合いを入れて 24 ページくらいのテキストを週末の土、日で作り上げた。

この日 11 月 20 日の授業は、情報処理センターで行った。実は学生たちの前に立って授業をするのは、前に一度ある。それは、大学院時代であった。大学 1 年生に情報基礎という大学でコンピュータを使う上での基礎を全員必修で指導する機会がある。私は、情報教育が専門でもあるので、月曜日の授業を見せてもらっていた。そして、エクセルを担当することを許していただき、学生にエクセルを指導した。だから、再び情報処理センターで学生たちの前に立つことは、自分にとっては喜びであった。

パワーポイント自体は、ワードやエクセルに比べて、容易である。文字の入れ方に加えて、アニメーション効果、つまり、文字の出かた、消え方などの効果を学べば、大体のことはできる。あとの反省で、学生たちも言っていたが、わかりやすくてよかったとのことである。

私は、授業で宿題を出した。パワーポイントを使って、自己紹介なり、サークルの紹介なり、自由に作品を作ってメールで送るというものである。

私は、次の日から、楽しみ半分、不安半分で待った。学生たちにとっては、電子メールはどちらかというとまだ携帯でやるというイメージである。課題提出の前に何度か学生たちにメールを出し、また、返信を受けていたので、メールは何とかなると判断した。さて、宿題はやって提出してくれるだろうか。次の日に一本届いた。「提出ナンバー１。えらいね。」とほめてあげた。そのあとポチポチと届いた。メールのタイムスタンプを見ると、深夜の１時とかもある。私はとっくに夢の中の時間であるが、学生たちにとってはまだ序の口といったところであろうか。締切間近になって、「送れないんです。」というメールが入った。何回かメ

ールで状況をきいていると、私の予想はドンピシャ。１０メガ以上の大きさのファイルを添付ファイルで送ろうとしていたのである。生の写真を貼り付けていくとこういうことはありえる。図の圧縮について、指導し、無事私の手元に届いた。締切時刻を少々回ったというのもあったが、19 名の学生全員が作品を提出することができた。私は、送ってきた学生たち一人一人にコメントを書いて返信をし、作品については、全員の分を CD に収め、次の火曜日の授業で配布した。学生たちの前で「締め切りの日曜日の８時が過ぎて、提出していないのが２名。どうしようかと思った。火曜日には、『叱り方』の指導ということではないが、叱らなければならないかとちょっと憂鬱な気分にもなりかけたのですが、きちんと届き、今みんなに、全員の作品が入った CD を渡すことができました。中身もそれぞれ、工夫されたものが入っていて、私もとても楽しかったです。みなさんも是非見てください。全員がそろうっていくとはすばらしいことです。みなさん、全員をほめておきます。よくやったね。」と。

授業作り

次の時間からが、本格的な授業づくりである。初回は、野口先生が、学生たちを小学生に見立てて、「大きなかぶ」の授業をやり、授業のコツを指導した。そしてマイクロティーチングのやり方について説明した。その時間の最後にくじを引き、グループ分けをした。私は仲良しグループを避けて、敢えてくじという方法にしてもらった。マイクロティーチングは、教師役になった学生が学生を相手に授業の一部分を行うということで、今回は 4 グループ、ですから各グループ 4 人ないし、5 人で 15 分の授業を作るものである。授業は、小学校の国語、算数、理科、社会のいずれかをやるものとした。

私たちは４教科の教科書を人数分印刷して、次の時間に学生に配った。グループごとに机を合わせ、どの教科の授業をするかを決めてもらった。私の担当は算数と理科で、コンピュータを使うということを条件にした。４教科分の教科書に目を通し、どの教科にするか決めるだけで、たっぷり１時間がかかってしまった。4 教科を 4 グループでやるのであるから、当然、かち合う教科も出てくる。それをどうやって決めるかなど話し合い、駆け引きをしながら、やっと教科が決まった。

その次からが、どう授業をするか指導案づくりである。私が担当した算数は「平行四辺形の求め方」の単元。そして理科は「台風の動き」であり、いずれも私が授業をやったことがあるところである。

算数のグループは、平行四辺形の面積を既知の長方形の面積の求め方を使ってどうやって求めるかというあたりを、理科のグループは、夏から秋にやってくる台風の日

本付近での動きをインターネットからの動画を使って確認するあたりを取り上げた。45 分の授業の指導案をグループごとに楽しそうに、そして真剣に考え、授業を作り上げていった。私たち指導者も話を聞きながら、アドバイスをした。グループの中には、「誰が授業をする？」っていうことが一番気になっていながら、誰も口に出せないで、話を進めているようなところもあり、「気持ちはわかるなあ。」と思っていた。でも、私は、「私は、じゃんけんで決めるのはいやだよ。やるんだったら、『自分がやる』って手を挙げた方がどれほど、きもちいいかわからない。じゃんけんで負けてやるのとは雲泥の差だよ。それと、授業をやった人は一番たいへんなんだけど、一番力がつくのも授業をやった人なんだよ。」と。あとは、小さい声でじゃんけんをしていたのも見て見ぬふりをしながら、グループでの授業者は決まっていった。

次の週はいよいよ授業となった 12 月最後の授業。教材を準備し、また、一方では、実際に授業をやってみながら、工夫を重ねていた。しゃべり方、板書の仕方、教材の出し方、長年教師をやっていると、学生たちのやっていることの未熟さが見えてくる。知らず知らずのうちに、教育技術を身につけているんだなあということを肌で感じる。もちろん、学生たちが最初からうまい授業などできるものではない。そんなに生易しいものであったら、我々プロの教師がやっていけなくなってしまう。「顔をあげて、たちの目をみながら、ゆっくり話しましょう。」、「子どもから発言があったら、まずそれを認めて、ほめてあげましょう。」、「黒板の文字ははっきり大きく書きましょう。」、「すぐ答えがでてしまう質問ばかりではなく、子どもたちは、『うーん』と考えるような質問を準備しましょう。」などと、アドバイスを続けた。

いよいよ 1 月 8 日。本番の日である。パソコンとスクリーンあり。ビデオカメラありという中。学生たちの表情にも楽しみと不安の表情が手に取るようにわかる。

授業内容を説明して、15 分の授業に入る。授業を見ているグループは、授業の評価をする。みんな真剣である。

私の目には、まだまだだなあという評価は強い。その一方、今まで多くの人の前で教えるという経験のない学生が、ここまで準備をして、何とかという程度ではあるが真剣に授業をしているということに感動を覚えた。先生の質問に対して、生徒役の学生も手をあげて答えるなど、協力体制もできていた。19 時半までの授業であったが、4 グループが終わったのが 19 時 45 分頃。みんなどっと疲れていたようだが、さわやかな表情で教室を後にしていった。

いい授業がやれるようになるために

自分もこんな偉そうな見出しをつけることができる程の実践家ではないが、先輩教

師として言えることは、心構えとして、①いい授業をたくさん見て、教育技術を盗むこと、②研究授業や公開授業は逃げないこと。③年に一本、二本は、人に見せる見せないに関係なく、工夫した授業をやってみることなどがあげられると思う。

聞くところによると教師を目指さない学生もいるようである。しかしながら、今回の授業づくりでは、「チームワークでの仕事の進め方」ということを学ぶいい機会になったのではないかと思う。よりよい方法はないか、人を引き付けるためにはどんな工夫が必要かなど、どの仕事についてもどこかで今回学んだことが生きてくるように思う。そして、この授業を通して、たまたま縁あって集った 19 名の学生が苦しみや喜びを共に分かち合い、しっかりした友情で結ばれたことも大きな収穫となったこともまちがいない。

大学の仕事から学んだこと

小学校の仕事を終えて、週一回は大学へ。なかなかきついものはあったが、ある意味で火曜日は私にとってとっても楽しみな曜日になった。小学校一年生の子どもたちと過ごすこともとても楽しいが、また、大学生それも、教員を目指す者を鍛えるということでは、自然と力が入ってきた。

今、教育界は大きく揺れている。教員の姿勢が問われ、もしかしたら敬遠されがちな仕事になりつつあるのかもしれない。でも、教員ほど楽しく、やりがいのある仕事はほかにないと思う。

私は、小学校と大学の２つの教員をやることができ、それぞれ、次代の社会を築く子どもたち（学生）を育てる機会を得て、とても嬉しくおもっているし、学生たちのひたむきさ、熱心さ、そして情熱は、私もおおいに感化され、「まだまだ、現役教師。負けないぞ。」という思いになった。

また、機会があれば、このような後輩の育成の仕事に携わりたいし、また、母校北海道教育大学の発展のために、力を尽くしていきたい。